

9 からす組

小説 昭和四年(一九一九) 大仏次郎

戊辰戦没直前の慶応四年、仙台藩士細谷十太夫は同僚箕作を斬り、上司の計いで会津探索隠密となる。仇討のため箕作の妻と弟が十太夫を追う。十太夫は彼を慕って集まってきた刺客たち数十名をもって「からす組」を編成し、須賀川の柏木屋を本陣として薩長軍に対し果敢なゲリラ戦をいどむ。これに箕作の妻、弟の仇討行のことが、官軍方の密偵お兼のことなどがからむ戦況不利となり、からす組は解散し、十太夫は新生活を志して仙台を去る。

早乙女貢にも同名の小説(昭63)があり、戊辰戦の展開に詳しく、十太夫の活躍の舞台も福島・郡山・須賀川・矢吹・白川・棚倉・三春・相馬と広がる。最後に十太夫は仙台の寺の住職、西南役の志願兵となった後明治四〇年大往生を遂げたとある。

11 さくらんぼ大将

菊田一夫 脚本 昭和二年(一九一七)



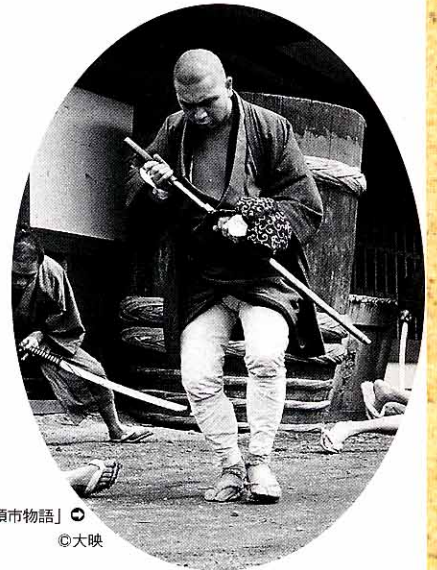
「福島県伊達郡茂庭村……といえ、(中略)飯坂温泉から十五、ばかり、山みちをのぼって行った静かな村である」で書きはじめられたこの作品は村の六郎太少年が豪放磊落な畜洋先生に連れられて、全国を葉を売りながらあるく物語である。NHKラジオドラマで昭和二六年一月から翌二七年三月まで放送され大好評であった。主題歌の作曲は福島市出身の古関裕而が担当。茂庭村は福島市に編入され、いまは巨大なダムが建設されようとしている。

20 天狗廻状

半井桃水 小説 明治四〇年(一九〇七)



寛延二年(一七四九)の米大不作の折、信夫、伊達両郡六八カ村の農民が、桑折代官所を相手に年貢減額を求めて一揆を起した。惣



「座頭市物語」 ©大映

ふくしまの 衆学大文

代の一人は長倉村組頭の彦内だった。この史実を小説風に書いたもの。

伊達町有志は半井に感謝状を贈ったほか、現在でも彦内を義民として顕彰している。

39 座頭市物語

子母沢寛 随筆 昭和三六年(一九六一)

天保の頃の渡世人座頭市は、盲人ながら居合抜きとさいころ賭博の達人で勝新太郎主演の映画、座頭市シリーズで一躍人気を集めたが、この奇抜なキャラクターは子母沢寛の随筆集「ふところ手帖」収載の短編「座頭市物語」から生れた。卑劣なやくざと手を切った彼は愛妻のおたねと共に姿を消し、その後の消息は「何でも遠く、岩代の安積山麓猪苗代湖の近くの小高い丘の辺りに住んだともいう。おたねは、湖に映る明月の夜を、座頭の妻として悲しんだかどうか」。郡山市湖南町には、この座頭市を連想させる人物が住んでいた屋敷や、彼が湖岸の絶壁の間道で何者かに突き落とされたという座頭転ばし七曲がりの道についての伝説が、今も語り継がれている。

58 姿三四郎

富田常雄 小説 昭和十七年(一九四二)



「十七の時、会津から出て来て、この一年の間は辻傳の車夫をして、苦学したという、まだ二十歳の青年の濁らぬ眼の色や、紅い唇、整った顔たち、ことに、その濃い眉とつやのある髪の毛が大きな魅力となってお幸を牽きつけた」と主人公姿三四郎は描かれている。お幸は三四郎の下宿するそば屋長寿庵の後家、三四郎にはお幸は四つで母を失って十二まで父の男手で育ったので母に近い女としてなつかしきを感じる。彼は敵対する柔術家村井半助の娘乙美に恋心を抱く。明治日本の近代化の中で激しく揺れ動く社会を背景に、古い柔術に対する伝統を守り近代的武道として柔道を確立する帝大學生の矢野正五郎の日本伝道館に入門した三四郎、新しい技山嵐で活躍する。三四郎のモデルは会津若松出身の日本伝道館の西郷四郎と言われる。

大仏次郎(おさらぎ・じろう)

明治三〇・二〇・九

一昭和四八・四・三

〇、本名野尻清彦

横濱生、「鞍馬天狗」

をはじめ時代小説で

出発したが、「帰郷」

「天皇の世紀」など

の大作もある。いま



横濱に大仏次郎記念館がある。

菊田一夫(きくた・かずお)

明治四一・三・一昭和四八・四・四横

濱生、脚本家や演劇プロデューサーとして

活躍。「鐘の鳴る丘」君の名は「などの代

表作がある。

半井桃水(なからい・とうすい)

万延元・二二一正五・一〇一

一、対馬生、樋口「僕に師と慕われたこと

は有名、日露戦争に福島県民から久保利三

郎が砲兵記者として旅順に行き、半井と知

りあい、戦後、久保の薦めにより取材に来

福して執筆した。明治四〇年九月一二月

まで東京朝日新聞に連載、同四一年に文禄

堂から刊行された。

子母沢寛(しもざわ・かん)

明治二五・二一昭和四三・七・二九

北海道生、「国光忠治」等の股旅ものや

「父子盛」などの歴史小説で知られる。洋

画家、岸好太郎の兄。

富田常雄(とみた・つねお)

明治二七・二一昭和四二・一〇・一六

東京生、「面」刺青」で三回直木賞を受

けた。「春灯奇譚」一巻、等がある。

60 二等兵物語

小説 昭和二十八年(一九五三) 梁取三義



「戦後の大衆文学の特異な現象は戦争小説の登場」だと荒正人が述べたが、昭和二十八年に出版された小説『二等兵物語』は、その中でも代表的な作品である。有無を言わず赤紙(召集令状)一枚で一兵卒として軍隊に召集され、無理遣りに死地へ赴かせられた庶民にとって本来は否定すべき軍隊なのに、敗戦で消滅すると階級制や暴力によって人間性を奪った世界が一種のなつかしきで思い出される。それを描いている。主人公古山源吉二等兵は会津若松の連隊に入營した。「私たちは不思議な感激に身を振るわせながら東部二十四部隊の営門の前に整列した。」「会津白虎隊発祥の地、鶴ヶ城下である」と描いている。これは映画化され東北出身の俳優伴淳三郎のユーモラスな演技で観客を集めた。現在、若松には連隊の営門だけが残っている。



「二等兵物語」 ©松竹



「丹下左膳」 ©松竹



「姿三郎」 ©東宝

78 丹下左膳

林 不忘 小説 昭和二年(一九二七)

「この風のごとき浪士丹下左膳、じつは、江戸の東北七十六里、奥州中村六万石、相馬大膳亮殿の家臣が、主君の秘命をおびて府内へ潜入している仮りの相であった。」「名刀乾雲坤竜を奪取するために、密かに江戸に放たれた片眼片腕の怪剣士。彼が行くところ争乱の嵐を呼び、血の雨が降る。名刀をようやく手に入れ、片恋の娘弥生と共に左膳は藩主の待つ相馬の松川浦へと船出したが」。この作品は最初「新版大岡政談」の題で発表。大河内伝次郎等名演の映画も人気を博し、相馬市には巨大な丹下左膳の碑も建てられた。



「月光仮面」 ©東映

ふくしま文学略年表

Table with 3 columns: 福島県の文学, 日本文学, 県内・国内の歴史. Lists literary works and events from 1937 to 1990.

83 相馬の仇討

直木三十五 小説 大正三年(一九一四)

母と密通し父を殺害した憎つき仇、九郎右衛門を追って清十郎たちは膏葉の行商をしながら磐城相馬郡へやって来た。「相馬原町へきた江戸の講釈師、牧牛

舎梅林、可成りの入りだが、今高座で軍記物を読んでゐる四十近い、芸名久松喜遊次といふ男、講釈師より遊人といった名だから勿論前座だが、締つた読み調子。実はこの喜遊次こそ九郎右衛門の世を忍ぶ姿、原町の広場で大勢の見物のなか、清十郎たちはみごとに父の無念を晴らした。作者が得意とした仇討ちシリーズの一篇で、千葉雄雄「新版日本仇討」にも同様の話が載っている。

90 東海遊俠伝

天田愚庵 伝記 明治一七年(一八八四)



愚庵は平藩士の次男として生れたが、戊辰戦争で父母らが行方不明となり、所在を求めて全国を放浪、山岡鉄舟門下となり、二五歳の時、鉄舟の世話で清水の俠客次郎長にあずけられ、次郎長一家の大政、小政、森の石松らの活劇を描いたこの作品は、水滸伝ばりの名文で、その後の次郎長物語の種本となった。当時の衆議院議長大岡育造の序、成島柳北校閲となっており、結尾には両親らの尋ね人広告も掲載されている。昭和五二年いわき民報社が復刻版を出している。

95 天中軒雲月・月光仮面

川内康範 小説 昭和三年(一九二八)・昭和三二(一九五八)

月よりの使者、正義の味方月光仮面。白いマフラーとマントをひるがえし、オートバイでさっそうと登場して悪を撃つ。日本版スーパーマンとして昭和三年からテレビに登場してお茶の間の人気を独占。さらに桑田次郎画の同名漫画も子供たちの夢と勇気をかき立て、月光仮面がここが大流行したが、実は両方ともに原作者は川内康範だ。彼は実在の女性浪曲師を描いた『天中軒雲月』という小説で、第一回の福島県文学賞を受賞している。

直木三十五(なおき・さしじゅうご) 明治四一(一九一六)～二〇(一九五五)



林 不忘(はやし・ふぼう) 明治三三(一九〇八)～三九(一九一六)



天田愚庵(あまた・ぐあん) 安政元(一八二四)～七(一八三〇)

川内康範(かわうち・こうはん) 大正九(一九二四)～二六(一九四一)